明治時代人の気概

松　枝　迪　夫

目　次

はじめに
1　大倉喜八郎（悪い噂のひとり歩き）
2　石黒忠悳（組織に生きる道，組織を生かす道）

はじめに

明治時代は薩長を中心とする西南雄藩の連合勢力により実現されたため，明治新政府の中枢は薩長土肥出身者で占められた。明治に始まる近代資本主義もそれらの人々の指導の下に育成されたから，経済界においても薩長土肥出身者やそれらと密接な関係を有する者がきわめて有利な立場に立って実業家として成功していったのは当然であった。三菱財閥の創業者岩崎弥太郎はその代表であり，三井も住友もその例にもれない。

本稿前篇では，こうした背景のない越後の農民から単身幕末の江戸に出て一代で大実業家として成功し，三井，三菱，住友，安田，大倉という五大財閥の一角を占めた大倉喜八郎男爵を取り上げることにする。巨人となればなるほど風当たりも強く，毀誉褒貶も甚だしいのは常である。その代表例に石ころ缶詰事件という世間の中傷を浴びた事件がある。軍隊に納入した缶詰に

石ころが詰められていたという事件で，何の関わりもない大倉がその責任者にされたのであるが，その後無関係だということが明確になった。それにもかかわらず，その後も依然その非難中傷が続きその悪い噂はますます真実の事件らしく定着してきた。この事件の経過と背景を中心に大倉喜八郎の経営者としての先見性と豪放磊落，また自由人としての気概を取り上げてみたい。[1)]

後篇では，大倉喜八郎とほぼ同時代に同じ越後の出身者で陸軍軍医総監，貴族院議員となって，明治維新後の日本陸軍の軍医制度を創設する上で最大の功績のあった石黒忠悳子爵を取り上げる。日本人の精神的バックボーンは何かといわれれば，最近はいざ知らず，儒教に根ざしもっと洗練された武士道の精神（新渡戸稲造が欧米人の啓蒙のために英文で書いた「武士道」に簡明に説かれている武士道の精神）といってよいのではないかと思われる。石黒忠悳の父は越後の農民出身であるが幕末の下級武士の養子となって一応薄禄の幕臣となったが，石黒忠悳は両親よりこの精神を叩き込まれて成長し，身命を賭して明治政府の一官僚として，後には枢密院顧問官として生涯を終えた。本稿ではこの人の武士道的精神（特に義，仁と勇）の発露，時代への先見性，無私，信念を貫く気概を取り上げた。

時代の大変革期には大人物が輩出するのが歴史の常であり，幕府崩壊と明治維新の近代国家建設にはそれにふさわしい人物群が活躍した。明治時代に生まれた五代財閥は皆例外なく第一級の経営者がいたために財閥となったのであるが，それは三井，住友といえども例外でなく，この幕末，明治初期に立派な大経営者を迎え擁したからである。この代表的経営者はいずれも若く，天才的経営能力を持っていたといってよい。

以下に五大財閥の創業者，中興の祖の名前と生没年を列挙する。

住友財閥：広瀬宰平　　(1828-1885年)

三菱財閥：岩崎弥太郎　(1834-1885年)

大倉財閥：大倉喜八郎　(1837-1928年)

安田財閥：安田善次郎　(1838-1921年)

渋沢系列：渋沢栄一　　(1840-1931年)

三井財閥：益田孝　　(1847-1938年)

〃　：中上川彦次郎（1854-1901年)

これを見ると，この７名の巨人は明治元年にほぼ20歳代から30歳代という若さであることがわかる。しかもほとんどの財閥創業者の出生が天保年間に集中していることは偶然とはいいながら歴史の必然性ともいえるのであろうか。ちなみに，他の重要人物の出生年をみると，西郷隆盛1827年，大久保利通，吉田松陰1830年（天保元年)，木戸孝允1833年，井上馨，福沢諭吉，五代友厚1835年，徳川慶喜，大隈重信1837年，森村市左衛門1839年，藤田伝三郎，伊藤博文1841年，伊藤忠兵衛（初代）1842年（天保13年）というように，この天保14年間には明治の資本主義経済の創業者らが集中している。日本資本主義の濫觴は天保から，といえなくもない。逼塞した徳川幕府の封建社会が崩れて，新時代が到来したとき，英知と気概を持って全く新しい未知の社会へと踏み出し近代資本主義を根付かせたのである。それに対し石黒忠悳(1854-1941）は大倉喜八郎や渋沢栄一と親友であり，実業界入りも進められたが，頑として金儲けのなりわいを拒否し自己の武士道的生き方を貫いたのである。

１．大倉喜八郎（悪い噂のひとり歩き）

(1) 生い立ちと生涯

「丈夫，棺を蓋いて事定まる」という。まことに大人物の一代を評価することは難しいものである。

大倉喜八郎男爵という人物をどれだけの人が現在知っているだろうか。平成10年８月，大倉商事株式会社が自己破産を申請して弁護士の破産管財人の世話になっているが，この大倉商事株式会社は第二次世界大戦まで五大財閥の１つに数えられていた大倉財閥の由緒ある商事部門（明治６年創立の大倉

組商会という我国最初の商社）である。この大倉財閥を裸一貫から身を起こして一代で築いたのが大倉喜八郎である。マッカーサーによって財閥家族の指定を受けたのは，断然巨大なグループだった三井，三菱，住友，安田（現在の富士銀行芙蓉グループ）の４社と，それに続く６社（中島，野村，大倉，浅野，古河，鮎川）で，この10社は財閥家族として全財産を持株委員会に譲渡させられたが，明治期と大正期を見れば，三井，三菱，住友，安田，大倉というような序列だろうか。

筆者が大倉喜八郎の名を知ったのは小学生時代からである。その２代目の息子の喜七郎が，ゴルフやスキー好きの人なら誰でも知っている伊豆川奈ホテルと新潟県赤倉の赤倉観光ホテルといういずれも第一級の風景と温泉とゴルフ場を持つ本格的なホテルを造った。筆者の育った寒村から遥かに妙高山を仰ぐと，その中腹に赤倉観光ホテルがよく見える。戦後，電力事情が悪くて電燈の灯りがあまり見えないとき，進駐軍の慰安所として高田市（今の上越市）全部の使用量に匹敵する電力を使って煌々と輝いていた。田舎は貧乏暮らしだから，まさに映画「天国と地獄」で，中学生だった筆者は一度は泊まってみたいものだと思ったりした。この２つのホテルは昭和７年頃に設立され，さらにホテルオークラも昭和37年同氏により造られた。

そのようなことで，御大の大倉喜八郎についての知識も大倉財閥の創業者という程度であったが，筆者の地元の人は同郷人ということで悪い印象は持っていなかった。しかし，後年になって大倉喜八郎のことを耳にする機会があると，「大倉は石ころ缶詰事件の会社だ」とか「死の商人」だとか例の左翼系の学者や運動家の口にする決まりきった財閥悪徳論からくる悪口が多かった。

大倉喜八郎（1837-1928年）の名は一代の政商として明治，大正時代はきわめて有名で，越後の新発田の地主の倅に生まれながら，幕末17歳で江戸に出て波瀾万丈の生涯を送り，裸一貫から巨富をなし，92歳で天寿を全うした。この人はあまりにも実業家として成功し，富をよく貯め派手に散じたので，

毀誉褒貶も激しく，そのため世間ではあくどい金儲けをした政商という悪い方のイメージが強かった。しかしそれは一面で，恩賜財団済生会への寄付，今の東京経済大学など３つの学校設立など公共福祉事業への桁外れの寄付を見ても並々でないスケールを感じさせる。

(2) 石ころ缶詰事件

ここで取り上げる石ころ缶詰事件も，全くその件には無関係だった大倉にいつか結びつけられて大倉喜八郎の悪徳商人ぶりを印象づけることに用いられた。どうしてそのようなことが生じたかを明らかにし，そこから我々は何を教訓として学び取らねばならないかを考えたい。

「石ころ缶詰事件」という言葉から人はどんなことを連想するだろうか。まず中身が肉でなく石ころだという場合。これは戦地の軍人がいざ食べようという段階で石ころだとわかるのだから心理的なショックが大きかろう。それから船積みした缶詰の梱包ケースの中に石か何かが詰められていたという場合。

よく考えてみれば，食品缶詰の製造は機械で大量生産だから製造過程で石ころを故意に入れることはできないし，経済的メリットもない。だから常識人ならこんないい加減な話を信ずることはなかろう。次に多数の缶詰の入ったケースを考えてみて，その全部または一部が石ころだったという場合なら，輸送中に何者かが抜き取ったためであり，これはよくある積み荷抜き取り事件で，缶詰メーカーも輸送の海運会社も被害者である。

本件はまさに後者の場合であり，しかも大倉は缶詰メーカーでもなければ運送会社でもなく，全くの無関係であることがはっきりしている。また大倉組は缶詰納入業者として独占的な地位にいたわけでもない。日清戦争当時には三井物産や石ころ缶詰事件の実際の納入業者の山陽堂主人の逸見勝誠もいる。軍隊へは，この他，米，味噌，酒など各業者が御用商人として納入しており，けっして大倉組の一手販売ではない。それにもかかわらずこの事件の

加担者のように扱われ，不当な悪口雑言が浴びせられた。右の真相が判明した後もそれは変わらず，一度悪い噂が広まった後はそれを打ち消し是正することは大変難しいことを示しているのである。

事件の発端は，明治27年12月31日の「読売新聞」に「商人の奸計」という見出しで，御用商人が名古屋丸で戦地に送った缶詰の箱は過半大石を埋め合わせてあり，上納した商人の名は不詳だが，製造元は東京○○町某とか聞いた，という記事で，4日後の続報で，積荷の箱に「東京大伝馬町一丁目山陽堂逸見勝誠（ヘンミカツアキ）」との貼り札があり，缶詰は1.2キロ入りの牛肉缶詰だと報じた。山陽堂の担当者が現場の中国の大連へ出かけて調査したところ，何者かが缶詰24個入りの木箱から12個を抜き取り，同じ輸送船内に積んであったバラスト石や荷造り用のわら，縄を代わりに詰めたということが明らかになった。こうして，納入業者山陽堂の行為だという疑いはなくなり，本来はこれでこの抜き取り事件は一件落着となるのであるが，いつの間にか大倉喜八郎が石ころ缶詰を納入し，いやしくも戦地にある帝国軍人に食わせようとしたという話になったのである。

大倉喜八郎がこの事件の責任者に結びつけられた理由は何だったろうか。山陽堂という無名の商人，それも無実となった今は，それは話題にならない。当時，政治家や軍部と結託して暴利をむさぼる悪徳商人，政商というようなキャッチフレーズが急速に成長する資本主義の流れの中で巨富を得ている商人に向けられていた。この事件は日清戦争の最中だが，そのちょうど10年後には日露戦争が始まり，社会主義も台頭し，反戦論も主張されていた。大逆事件で有名な幸徳秋水や堺利彦が「平民新聞」を創刊したのもこの頃である。

このような反戦小説に木下尚江の「火の柱」があり，「東京毎日新聞」という新聞に連載された。この小説の中に，大倉喜八郎をモデルにしていると明らかにわかる大洞利八という悪徳政商が登場し，この悪徳商人があたかも石ころ缶詰事件を起こしたような記述をしている。

問題の箇所は商人と高級軍人の短い会話である。「肥満漢の東亜汽船会社

の社長，五本の指に折らるる日本の紳商大洞利八」と「当時実権的海軍大臣と新聞に謡わるる松島大佐」が料亭で話し込む。

「ウム，其れは先づ其れとしても，君，山木が早く取り決めないのは不埒極まる，今日まで彼を庇護して遣ったことは何程とも知れたもンじゃな。彼の砂利の牛肉罐詰事件の時など新聞は八釜しい……」と言ひ掛くるを，大洞あわてて押し留めつ「松島さん，そんな舊傷の洗濯は御勘辯を願ひます，まんざら御迷惑の掛け放しと云ふ次第でも無つた様で御わすから」

「それから彼の靴の請負の時はドウだ，糊付けの踵が雨に離れて，水兵は縄梯から落ちて逆巻く涛へ行衛知れずになる。艦隊の方からは劇しく苦情を持ち込む，本来ならば，彼時山木にしろ，君にしろ，首の在る筈が無いのぢやないか」

小説が事実報道でないのは当たり前だが，一般読者はそこを厳密に区別せず漠然とした事実的印象を持つ。なかには，火のない所に煙は立たないという一般論から，これは多分本当の話だろうと勝手に推測する。こうした推測の下地には，政治への不満，貧しい庶民生活，それに引き替え巨富を儲けている一部商人への反感などがあろう。その下地のところに，憤慨させるような出来事があればたとえ噂であっても人はそれに飛びつきたい。大倉がこの事件に結びつけられたのはこの小説が源流であろう。

その間の事情を伝えるものに大杉栄の『自叙伝』の記述がある。大杉栄は大倉喜八郎と同郷の新発田に小学校から中学２年まで過ごしている。明治37年（「火の柱」の連載時）彼が外国語学校在学時のことである。ある雪の降る晩に数寄屋橋の平民社で毎週開かれる社会主義研究例会の日にはじめて出席したところ，その席で「ある男は，『私は資本家の子で，日清戦争の時大倉が缶詰の中へ石を入れたということが評判になっているが，あれは実は私のところの缶詰なんです。もっともそれは私のところでやったんではなくって，大倉の方である策略からやったらしいんではあるが』と言った。『それじゃ，やはり大倉の缶詰じゃないか。どうもそりゃ，君のところでやったと

いうよりは大倉がやったというほうが面白いから，やはり大倉の方にしておこうじゃないか』こういったのもやはり堺だったろうと思うが，みんなも『そうだ，そうだ，大倉の方がいい』と賛成して大笑いになった。その資本家の子というのは，今の金鵄ミルクの主人逸見なんとかというのだった。」

右のうち，大倉の方である策略からやったらしいというのはその後の調査でも不明。「逸見なんとか」は山陽堂社長の逸見勝誠の２代目社長斧吉である。斧吉は資本家の子に生まれながら商売に疑問を持ち，社会的正義感の強い人で，若い頃にありがちな情熱で，正義，平等，博愛のスローガンを掲げた当時の平民社の活動に惹かれたのである。

さてこの時より22年も後の大正15年に斧吉は缶詰時報に「石の缶詰事件」について真相を発表した。それは世間は依然大倉組を犯人とする漠然たる印象を持っていることが東京缶詰組合の総会でわかったので真相を訴えたのである。その話を缶詰時報に載せた動機は，その席上その真相を聞いた阿部さんという業界の人が「それは珍談だ，大倉喜八郎翁ももう年だ。早く雪冤してやらねばならぬ」と叫んだので，そこで「大倉喜八郎という尊敬すべき長老に対する責務さえ感ぜしめられる，これが貴重な紙上を借りて，持ちつけぬ筆のたどたどしさをも憚らぬ所以である」と述べていることから明らかである。

噂話は所詮は噂話で，いつかは消えてゆくものである。ところが，噂話をよく論証もせずに学者や評論家が再生産するとなると話は別になる。

第二次世界大戦後になって，昭和38年木村毅『日本実業家列伝』で大倉喜八郎について書いている中で，石ころ缶詰事件について次のように記述している。

「なかんずく，砂利のカンヅメ事件は，最も有名で大倉の悪名を天下に流した。兵隊が，戦地で配給された牛肉のカンヅメをあけてみたら，中に砂利がつまつていたのだ。何月何日までに何萬箱おさめろと命令され，生産が間に合わぬので，員数をいそいでそろえるため，不足の幾カンか，砂

利をつめたものを納入したのであろう。

また，日露戦争の時には中味の腐つたカンヅメをおさめて，姫路師團の兵が出征に先立ち，それを食つて黒血を吐いたとか，旅順閉塞隊の兵のはいていた靴は糊ではつただけで，鋲が打つてないので，海水にぬれて，裏皮がはがれて，甲板からすべり落ちて溺死したとか，いろんな噂が立つた。

それについて知りたかったら，木下尚江の小説『火の柱』をよむとよい。どこまでが事實か判斷できぬが，世間につたわつた當時の評判は，それで推測できる。」

上の記述からわかるように，木村の所論は，故意かどうかわからぬが噂話としてなのか事実としてなのか曖昧な表現であり，第1段は事実として，第2段はいろんな噂として書いていることに注意されたい。しかも，「それについて知りたかったら『火の柱』を読むとよい」という。この小説の記述は前記のようにフィクションだから，フィクションを議論の根拠としているお粗末なものである。しかも，この木村の記述は，この事件の直後，単なる抜き取り事件であることが判明し報道もされていることを無視して，勝手な推測を書いている。

噂話の再生産からさらに進んで，いかにも事実のように記述しているのは岩波新書（昭和35年初版）のベストセラーといってよい岡倉古志郎『死の商人』である。その中で，大倉財閥のことにふれたところは，勝田貞次著『大倉・根津コンツェルン読本』（昭和13年春秋社）からの引用という形をとりながら，引用の仕方により次のように事実が歪曲・変化している。

まず勝田の原文では次のように書かれている。

「今，戦争と大倉財閥発展の奸計をば列挙せば左の如くである。

……（三）日清戦争の時には「石コロ缶詰」の悪宣伝を浴びせかけられた程，軍需品の供給で儲けたのみでなく，支那に於いて，相当の利権を獲得し，大陸発展の基礎を築き上げたこと，……

（四）日露戦争の場合に於いても，軍需品の輸入と輸送で巨利を得たの

みでなく，満州に於ける利権を獲得したこと，

殊に，日清戦争では，所謂『石コロ罐詰』の悪宣傳を浴びせかけられた程，大倉の侵略資本と云ふと，利益本意の商賣として一般からの反感が旺盛であつた。勿論，後年に至つて，陸軍内部から糧秣關係の雑誌に『石コロ罐詰』の眞相が發表されて，今日では，財界の笑ひ話しとなつてゐるものゝ，當時に於ては，軍用糧食と云へば大倉組の獨占する處であつたから，デマも執念深くつき纏つたに違ひない。」

岡倉はこの（三），（四）の部分の記述を単純に次のように引用した。

「日清戦争では『石ころ缶詰』を納入して暴利をおさめ，」「日露戦争でも軍需品の輸入，輸送で大儲けをした」（勝田貞次『大倉コンツェルン読本』）。

このように岡倉の引用では，勝田の原文の，「石コロ」缶詰の悪宣伝を浴びせかけられたほどという，根も葉もない噂であるという趣旨が単なる事実にすり替えられている。このすり替えは意図的かどうかわからないが，同書の全編に見られる死の商人への感情的反感と予断を考えれば，罪深い著作といわざるをえない。

「火の柱」の著者の木下尚江は新聞記者，作家であるが明治19年イギリス法律学校に入学し，後に東京専門学校（早大の前身）を出て，明治26年24歳で松本で弁護士を開業した。あまり弁護士として一所懸命ではなかったが，「平民新聞」の筆禍事件では弁護人として弁護活動をしている。しかし，社会主義運動家で資本家を攻撃するのが中心だから，現在の弁護士が基本的人権の擁護を考えるのとは全く異なるのである。時代によりその職責や使命も異なるから，現在の目で批判しては酷かも知れない。

喜八郎はこんな噂に対し，そんなことは考えればすぐわかることで馬鹿馬鹿しい話だとして相手にしなかった。芥川の河童に次の語あり。「自己を弁護することは他人を弁護することよりも困難である。疑うものは弁護士を見よ。」天地に俯仰して恥じない生き方をしたと信じている彼としては弁解の

必要も認めなかった。

(3) 噂への姿勢——安田善次郎との対比

喜八郎と対比されるのは安田財閥の創業者安田善次郎である。彼も悪い噂に生涯とりつかれ，末路はそのため暗殺された。彼は富山の下級武士で農業も兼ねていた貧しい家に1838年に生まれ，20歳で江戸に出て鰹節屋に奉公したところは喜八郎とそっくり。そして彼は慶応2年日本橋小舟町で銭両替商の店を開いた頃，乾物店を始めていた喜八郎と知り合い，以後協力し合い，後年五大財閥の2つになるという奇縁がある（ちなみに五大財閥のうち，一代の創業者3人－岩崎，安田，大倉－はいずれも天保年間の生まれである)。

安田は勤倹努力型だが性向は地味で喜八郎と正反対（家康と秀吉の関係)，寄付は他力本願だからというのであまりしなかったので，ケチの噂が高く，そのため表向き金の無心に訪れた青年に刺殺された。その直前約束された東大安田講堂への寄付によりこの噂が改善されたのは皮肉である。他方，喜八郎は金は社会に還元すべきだという信念でよく寄付に応じ，92歳の長生きをした（財閥筆頭格の岩崎弥太郎は52歳で胃ガンで死んでおり，弟岩崎弥之助の分を併せた以上を生きている)。財閥創業者のうち喜八郎一人が功名成った，ただ悪い噂を残して。

根拠のない悪い噂を退治する方策は如何。空気のようなものでも，噂を生み出す根源が突き止められれば，名誉毀損やプライバシー侵害で著者や出版社相手に訴えることもできよう。しかし木下尚江は冥界だし，噂を再生産した岡倉，木村に対しても古すぎる事件となる。

所詮法律による対処方策は難しいようである。その対策は日本的な言い方をすれば人徳（この点で渋沢栄一の生涯は範とされている）を磨き，あとは時運に任せるしかないのであろうか。[2)]

2．石黒忠悳（組織に生きる道，組織を生かす道）

(1) 生い立ちと生涯

森鷗外という名を知る人は多いが石黒忠悳という名を聞いた人は少ないし，忠悳をすぐ「タダノリ」と読める人はもっと少ないだろう。石黒忠悳（1854-1941）は鷗外の大先輩で同じ職務の陸軍軍医総監にずっと早くなり，鷗外を引き立てた人である。

この人をここに取り上げるのは越後の偉才であり，現在でも範とすべき生き方が見られるからである。越後の英雄は上杉謙信だが，忠悳の先祖は謙信に仕えた武将であり，子孫は三島郡片貝村の枝郷池津に豪農として代々住んできた。彼自身は伊達政宗の生地伊達郡梁川に生まれたが，父の代に父が片貝より上京し苦心の末代官手代となることに成功したので，父は代官所勤め(今も各地に代官所跡とか陣屋といわれる旧跡があるが）をすることになった。これは今の国家公務員のようなもので，全国に800万石といわれた幕府の直轄領があり，いわばその知事として治世に当たるのが代官で，手付，手代はその部下の役人である。

さて，父は梁川の陣屋に勤務したり，甲州に勤務したり，江戸に戻ったりし，彼が9歳のとき江戸に転勤し浅草三筋町に住んだ。この頃書家として有名な中沢雪城に学び，また毎月父に伴われて上野公園にある東照宮に参詣に行った。小禄の者は東照宮の塀の中に入るのも許されなかったので，門の外の石の上に座って礼拝するだけだった。父は彼に教えて，「立身出世するには文武の道を励み精神を鍛え，忠孝に専念し，東照宮を信心しなくてはならぬ。お前もせいぜい勉強して，どうぞ槍一本の主人となり，黒板塀の内へ入って拝礼をする身分となってくれ」といった。

10歳の頃に有名な安政の大地震があって夜中に病身の父が庭先に避難したりしたが，翌11月病気で死去。遺骨は郷里の片貝に納めた。なお，藤田東湖

が今の東大農学部のある駒込の水戸邸で圧死したのはこの地震の時である。

厳格な父の教育を受け，武士の心得を叩き込まれた。それを彼は父の言葉としてこういっている。「汝も立派な士になろうと思うなら，平常文武に励み，精神を養うことに専念せねばならぬ。精神を養うには，非行をせず，常に天地に恥じざるように心がけるが第一である。分限を知り責任を重んじ，忠孝を旨とし，治にあって乱を忘れず，何ごとも戦地を思うて身を持たねばならぬ。」これが戦乱もない平和な時代が二百数十年も続いた幕末の武士のバックボーンだった。

父が亡くなって，母と共に暮らすことになり，人より早く12歳で元服し，父の跡を継いで本所の代官所で働き出した。文書の謄写や書類整理が仕事である。

代官手代で本所の代官役所へ通っていたとき，大暴風雨があって，人家の屋根が吹き飛ばされた。そこで紀国屋文左衛門の故知にならって，修理に屋根釘が必ず必要になる。幸い通りすがりの店にあるから買っておこうという気になり，肌身離さず持っていた一朱で屋根釘を買った。風呂敷に一包みあった。夕方出入りの屋根屋がこの話を聞いて，恐れ入った智慧者だとおだててくれ，周りの人も神童とほめそやした。得意になって2階に上がると母親が来て，そこへ座りなさいと命じた。母は厳たる口調で，父の逝去の折の枕元で母はお前を立派な武士に致しますと申した筈であるのに忘れたのか。町人にでもなるつもりか。金を儲けることを業とする町人の真似をして得意になっているとは見下げ果てたものだ。明日は大小を売って算盤を買うがよい，と説教した。そして石黒の夜具を階下へ投げ落とし，もうこの部屋へ上がることはならぬと命じた。

石黒は深く反省し，もともと儲けようと商売気でやったのではなく，機敏さを示して買っただけであるのに，頭に釘を打ち込まれることになった。後年彼も渋沢栄一らと親交があって実業界に聘せられたこともあったが一切断ったのはこの母の教えゆえだったと述べている。すべてがマネー第一主義の

戦後の米国流の風潮が蔓延している折，こういう生き様を見ると清涼の風が吹き通る気がするではないか。

しかし，ここでは彼の思うように学問ができないので，塾に入りたいと思っていたところ，母の弟が代官手代で信州中之条の陣屋へ赴任するというので，13歳のとき乞うて連れていってもらった。叔父の家の３畳一間を借りて勉強をした。彼が14歳のとき母は面疔で37歳の若さで急逝した。この遺骨も片貝村の父の墓に合葬した。このとき，それまでの平野庸太郎忠恕という名を忠徳と改め，後に徳の古字の「悳」に改めた。彼には妹２人がいたが夭折し，14歳で天涯孤独となった。そして彼の人格と精神を支えることになる勤皇心を起こしたのはこの年で，日本の国体や歴史書を学ぶうちに，衰微した皇室の力を憂える心が胸に湧き，その頃の尊皇攘夷の説も世間に広まりつつあり，ひとりの身となってひたすら勤皇の念を深めることになった。その頃，大島誠夫という江戸の勤皇の士と交わり深く影響された。

安政５年14歳のとき，片貝村に住んでいた伯母方の石黒家の養子となり片貝村に移り住み，そこで村塾の手伝いをし，その後自身で学塾を開いて郷党の少年を教えた。17歳のとき妻を娶った。19歳のとき佐久間象山を訪れて教えを乞うている。このときよほど深い感銘を受けたか，象山の前でいっぱしの尊皇攘夷の論を開陳したところ，尊皇のことはよくわかるが攘夷というのは愚かな考えで，彼の西洋を知らず，己の力を知らずして何の攘夷かと諭され，若い者は大いにまず我が国の学問をなし，その上で西洋の学を極め国の力を競し兵備を完成することが大切だと完膚なきまで論破された。

その折，象山に鍔に彫る文字を書いてもらいたいと願ったが，彼の持っていた刀は上杉景勝から拝領した先祖伝来の刀であり，象山の先祖も上杉の勇将斉藤大野守の子孫で先祖は同じく上杉家の家臣という因縁で快諾し，書いてもらった。

医家を志したのは，何らか生計の道を立てる方法を考えるうち田舎では整骨医がよいと思ったからで，その修業をするため江戸に出ることにした。文

久4年，20歳のとき名倉の一族の名倉弥五郎宅に入門を乞うた。この人は人物で，石黒を見て，範囲の狭い整骨術だけ専門にやることは勧めず，まず一般医学を修めなさいと諭した。

西洋医学を学ぶことを志した彼は，金がないから西洋医の所で住み込み書生として学ぶことを考えた。縁あって下谷摩利支天横町（今のアメ横）辺りの柳見仙という医家の書生となれた。そこで初めてオランダ語を学ぶことになった。勉強はいつも朝飯前で終わり，その後病院の手助けや薬取りに行き，食品の買付けにも出かけた。夜やっと暇ができると読書，写本で毎晩1時前に寝ることはなかった。

一通りオランダ語や医家実務を学んだが，本格的に西洋医学を学ぶには当時長崎の官立の医学伝習所（精得館）か江戸の官立の医学所に入る必要があった。医学所は金がかかる所だが，幕府直参の人の厄介ということで無月謝の特典を受けられ，ここで慶応元年から3年間みっちり医学を学んだ。24歳で卒業して医学所句読師（助手）となった。

ところが，同年明治維新となり混乱のため越後に帰った。しかし翌年再上京し，文部省に出仕し大学東校（東京大学医学部の前身）に勤務。明治4年27歳で文部省を辞め，兵部省軍医寮に出仕。ここから我が国の軍制の改革の一翼の陸軍軍医制度を創設するという畢生の大仕事に携わることになった。

明治23年46歳で陸軍軍医総監，医務局長となり軍医制度の名実共頂点に立ち，明治28年51歳で男爵に叙せられた。明治31年54歳で大倉喜八郎の請を入れて大倉商業学校（今の東京経済大学）の創設に中心的働きをした。58歳で貴族院議員に勅撰され，また日本赤十字社社長に就任，枢密院顧問官に就任，子爵に叙せられた。昭和16年4月天寿を全うした。享年96歳。

(2) 組織作りの苦労と人間の偉さ

大学東校（今の東大医学部）で西洋医学の教育に粉骨精励していた石黒らの熱意をそぐ事件が起こった。西洋医学に対する皇漢医道復興運動という一

種の反動で，漢方医の系統の人たちが勢力挽回を狙って「皇漢医道」復興という名目で，時の大学（これが文部省に当たる）や宮中に働きかけた。これが成功して大学に皇漢医道御用掛という部局が置かれることになった。これは明治維新後の西洋医学の普及に対する重大な障害になりかねないので，石黒らが猛反対し，文部当局の考えをやめさせることに成功した。ところがこの人たちを東校が受け取って一室を設けて毎日通勤させることになった。この人たちの扱いをめぐって長岡出身の長谷川泰は解雇せよという強硬論者だったが，石黒の案で，数ヵ月間月給を払い，毎日東校での西洋医学の優秀さを見聞させることにした。そのうち彼らも大いに覚り，それぞれ別の職，国学の先生や他の役所の事務官になったりして自ら解決した。

最初の文部卿江藤新平が小人物の大木喬任に代わると，その子分の一書記官が大学東校へ来て威張り散らしそれに楯突いた石黒は遂に罷免された。

役人暮らしに愛想をつかした彼は洋行しようと決心し，その準備に越後に帰省しようとしていたところ，兵部省で軍医制度を創設する必要があって，その仕事に協力するよう軍医頭（長官）の松本良順に懇嘱され，遂に引き受けた。

松本良順は西洋医学界の最高実力者で，かの西郷隆盛も先生の家を訪れ山県有朋らも何回も訪れてやっと兵部省に引っ張り出したという超大物。この人がわざわざ石黒の家へ出向いての頼みとあって断りきれなくなって引き受けたが，条件を出した。

第１は松本良順在任中は10ヵ年在任を保証。

第２は人事，医官の採用は学術の試験で行い，兵部に多数いる薩長土肥の出身者を特に優遇しないこと。

第３に学術試験を行って現在の医官を淘汰すること。第４に何事でも石黒に対する風評があるとき石黒の意見を聞いたうえで判定を下されること。第５に軍医寮の奏任官以上は必ず医学者をもって補任すること。これらの条件はいずれも近代的な公平，能力主義の行政の根幹をなすものであるが，これ

を松本は快諾した。そして次のように言い添えた。「一旦君に委ねたことは君の思う通りやってもらいたい。その間に過失が生じた節は責はすべて自分が負う。創業の際，躊躇逡巡するのは好くない。大胆に果敢にやってくれるように。」

この言は最近の政，官，財の腐敗，無責任の風潮に照らしてどう受け止めるべきだろうか。さて石黒は渾身の力で軍医制度制定に当たることになった。出所進退でもう1つ見習うべきことがある。松本は彼の待遇を今までの八等出仕から七等出仕にするといったが，彼はもし等級を進めて兵部に入ったら，世間は石黒の心事が俸禄名声にあると誤解しないとも限らないと固辞した。こうして明治4年9月八等出仕で兵部省に入った彼はその後薩長土肥の出身者や旧弊の抵抗を断固として排し，きわめて合理的な近代医療制度を陸軍に創設したのである。彼が縦横に腕を振るえたのは，松本良順の全面的な信頼と，さらに兵部省の実質的長官だった兵部大輔山県有朋の強力なバックアップがあったからである。

石黒は初対面の挨拶で山県に次のように述べた。

「軍医は他の官職と違い学術を以て採否・等級を定められねばならぬ。大輔の前でははばかり多いが，世は全て薩長土肥の出身でなければ重用されぬ有様であるが，軍医のような学術社会では藩閥を眼中に置かぬことを条件として兵部の仕事をする。」山県は後年明治の元老となり長州閥の頭領と目された人物だが，この話を了として酒食を饗して快諾。石黒は当時としては全く意外のことであったと述懐している。

さて，軍医寮での第1の仕事は各藩からの兵隊に付いてきた軍医の淘汰，今でいうリストラである。それを半数を罷免し，残りをさらに試験をして階級を定めようということになったが，その半数をどうやって決めるか困難である。松本は現任者の名簿を熟覧した後，目を閉じて連名簿に朱線を引き，朱線に当たった者を一様に罷免することにした。石黒はその豪放さに驚いた。こんなことができるのは，松本の出仕がもともと西郷や山県の三顧の礼に応

えるものであったという背景に見られるように，彼の桁外れの地位と実力を証するものである。残りの半数は石黒が一々学術試験を行い，それで官等を決め，落第者も出た。多くの合格者のうちで長州，薩州はごく僅かとなった。当然のようにリストラされた人たちは藩閥の縁故で猛烈な反抗運動を起こした。普通の改革はこの反抗で失敗するか大幅な妥協に終わってしまうのであるが，山県はすべてこれらを抑えこんだ。石黒は山県を「謹言にして言責を重んずる人」と評価し，人事についてこんな公平な態度は他に類のないことで，文部の大木喬任とはこんなにも違うかと思った。

ちなみに松本良順のことであるが，彼は佐倉藩医の家に生まれ，医師松本良甫の養子となり長崎でポンペについて医学を学び，その成果を「朋白医学七科書」として著した。これが西洋医学を学ぶ者のバイブルとなった。旧幕時代は将軍家茂，慶喜の奥御殿医師であった。幕末は賊軍として東北に逃げたが，自首して幽閉された。その後放免され浅草今戸で開業したところ，平民を診察してくれるというので評判となり大いに繁盛した。豪傑で毎夕吉原へ泊まり，朝そこから駕籠で今戸へ，診察が終わると吉原へ戻るという暮らしをした。その後早稲田に病院を建て，今戸の重病人をそこへ入院させた。この病院の地が大隈重信の邸宅である。ちょうど兵部省で軍医制度を作らねばならぬというので白羽の矢が松本に立てられたのである。

このとき罷免された者の不平組の抵抗にこんな話がある。不平組が松本軍医頭の所に押しかけてきたとき，松本は竹の筒に小刀で何かを彫っていたが見向きもしない。暫くして手を休めて，「軍医寮のことは一切石黒に任せてある。彼が熱心に処理してくれるので自分は閑散に苦しんでいるところから，竹に彫刻しているのだ」といって取り合わなかった。そこで不平組は夜石黒宅へやって来て今後の方針如何と詰問した。彼は誠心誠意をもって現在の処置と今後の方針を話したところ彼らも諒解して笑って帰ったという。

(3) 洋書の価値——辞書1冊が家1軒

忠恵の入学した医学所は下谷和泉橋（秋葉原近く）にあって，頭取1人，教授5人，助産婦4人，事務長1人，事務員3人。学生は通学者3人，寄宿生30余名，学科は内科，薬剤学，生理学，病理学，解剖学，この他に蘭学，理化学，数学など。一番時間を使うのはこれらの蘭書の医書を読むことで，蘭学の句読を教えるのが句読師。カラーメルの蘭語の術語辞書など珍重され，それを所持していた佐倉藩主堀田の家医が羽根沢の富士山の見える場所に新築しようとして，その辞書を45両で売り，20両足して65両の立派な家を作った。十数年後長崎で1冊4両2歩で忠恵はそれを買うことができたとき，そんなに安く手に入れることができて今は仕合わせだといった。

(4) 人生の岐路——外国留学の辞退

明治の初め多くの留学生が欧州，米国へ留学したが，石黒はその仲間に入れられていたのを固辞し，国内にあって医道改正の中心人物として働くことを決心した。もし留学していたら，東大教授としてそうそうたる学者としての名誉，治療家としての富貴を得ていたであろう。しかし行政官としての功績は他の何人も及びえないものであった。人の幸福とは何か，彼が老年顧みていったことを考えねばならない。

「自分の職分上止まるべきに止まったと思い，それが結局国家のために私一己としても仕合わせであったと観じております」と。彼の親友の長井長義は蜂須賀家の藩医の出であるが，ドイツに留学し，帰国後東大で薬学を講じ，日本薬局方の制定に尽力した，薬学界創業の大御所となり，またドイツ女性と結婚し日本とドイツの親善に大きな役割を果たした（ちなみにこの子息が長井亜歴山といって著名な弁護士である）。したがって，もし石黒が学者，医療家の専門家になっていたら遙かに知名度は上がっていたであろう。しかし，彼でなければなしえなかった近代医療制度の確立と医学界の人材の育成こそ彼が自覚しまた予見したとおりの，近代日本の創造に不可欠の重要事だ

ったのである。

(5) 女子に医師免許を与える道を拓く

彼の開明的，革新的思想は，女子の医師開業試験受験を認めるべきだということにも現れている。女医への道は許されていなかったが，彼が荻野吟子という女子学生の希望を入れ，大変努力して実修をさせてくれる病院を見つけてやり，医師受験資格も認めさせるよう内務省衛生局に交渉し，遂に明治18年彼女は試験に合格することができた。女医第１号である。

(6) 赤十字国際会議で日本の立場を主張

明治20年９月ドイツのバーデン州カルルスルーエでの第４回赤十字国際会議に日本政府代表委員として出席した時のことである。当時日本はまだ不平等条約で苦しめられているような後進国である。会議第２日目に突然，「赤十字条約中にある列国は相互に恵み，傷病者を彼我の別なく救療する。」との明文は欧州以外の国も適用すべきか否かという日本差別の議題が提出された。突然のことであり，米国代表の発言もない。その時石黒は奮然起って反対の大演説をぶち，場合により退場すると強く抗議した。通訳は随行の森鷗外であった。議場騒然となり，オランダ代表その他の石黒支援の発言があってこの議題は撤回された。彼の勇気ある決断と周到論理的演説がそうさせたのである。

(7) 漢方医側の不当要求を抑える

古方医（漢方医）の側は，明治25年古方医を以て医師となすという運動を根強く進めそのため法案を議院に請願した。これは全国にいた２万人余の漢方医が，今後試験を受けて合格しないと医業をできなくなったので死活問題だといって根強く反対したのである。内務省の衛生局長や山県内務卿の所へ直談判するので，皆それに閉口して石黒の所に回す。彼は堂々と論戦した。

「漢方が本当によいと信じているのか疑わしく思う。法律で西洋医学を是とし試験制度も確立しているのに，たかだか『傷寒論』１巻読んで基礎知識の素養にも努めず安易に医師たらんとするとはよくない。法定科目を学んだ上でその上に漢方がなおよいというならそれを行うは妨げない筈だ」と皆を逆に説伏した。誠心誠意と不退転の信念が人を動かしたのである。

(8) 学校創設に無償の奉仕

軍医制度の創設が石黒の公的職務であったが，公のために尽くすべきだという信念から，同じ越後の新発田出身の大倉喜八郎の請に応じて大倉商業学校（今の東京経済大学）の創立に一肌脱いだ。五大財閥の１つを創業した大倉喜八郎は晩年儲けた金は公益に散ずべきだと考え，いろいろ使い道を考え，教育こそ国家百年の計と思い，学校創設を企てたが，その実現を同郷で信頼している石黒に託した。石黒はそのため大いに尽力したので多くの人は彼の努力と徳を偲んで彼を創立者と思っている。同じ越後人の巨きな友情によって蒔かれた教育の芽は大樹となっている。

(9) 銅像建立の話

明治42年石黒の功績を讃えて鋳像を建てる話が起きた。彼は最初の軍医総監松本良順より先に建てるのは不可と反対したが，最後は妥協をして両人の像を建てるのならよいといったが，松本は薨去して顔も知らぬ人が多いから金が集まらないという。

石黒はその分の金は自分が出すと言い出しその他の数人からも出金があり，ようやく両像相並んで越後の美術家武石弘三郎氏が作った。こういう義理堅いことをする人は稀有である。

(10) 差別社会での立身出世

明治維新は薩長土肥の諸藩の力によってできたものであるから，この有力

な藩の出身者が政府をはじめ社会の中枢を支配するようになったのは当然であった。これ以外の藩や特に会津など幕府側に立って対抗した諸藩出身者はひどく冷遇されたのもその結果である。そこで越後の出身者も薩長土肥に比べて立身出世で不利なのは止むをえない。今の民主的な世の中から見れば想像もつかなかった不平等なことであるが，このことを現在私共がある程度推測できるのは，東大法学部出身者が国家の中央官庁やかつての国鉄のような国営大企業の重要ポストを独占していたし，今もそれが顕著であるという事実である。石黒忠悳は父が越後出身の旧幕臣の末端に連なっていたという事実から明治新政府の中で頭角を現すということがいかに大変なことであったかをまず思わねばならないだろう。この点で，もう１つの決定的な社会的差別があった。それは士農工商の身分で，この点石黒は微臣だがそれでも武士出身であった。これは農民や町人出身に比べまだよい方だった。例えば明治で五大財閥を創業した三菱の岩崎弥太郎が武士階級であったため大変恵まれたスタートを切ったのに比し，安田の安田善次郎や大倉の大倉喜八郎が非常なハンデを乗り越えなければならなかったのを見ればよくわかることである。大倉喜八郎が農民という身分出身で五大財閥の１つを築いたというのは，官界では出世は難しかったからであるが，石黒は武士出身であったがここでの薩長土肥の出身者でないことからハンデは終生あった。したがって，明治の元勲やそれに続く著名な人物像は多くがこの四藩出身者であったから，石黒の名が見あたらないのは彼の功績，人物が小さかったからではなく，この差別の結果である。

(11) 96年の夢

石黒は少年期に尊皇攘夷の志を持ち，象山に攘夷の愚を諭され，日本の近代化こそ真の攘夷という夢に燃え，まず維新で尊皇の夢を果たし，その後日清戦争，日露戦争を通して陸軍軍医制度の確立という夢を果たした。その後第一次世界大戦を経，日本が軍国主義化し独裁国家化するのを案じ，昭和３

年6月枢密院での治安維持法改正審議に少数派として反対，第二次世界大戦の直前である昭和16年4月96歳で死去。したがってこの大戦が4年後我が国の敗北に終わり，彼が精魂傾けた軍医制度も陸軍と共に消滅するの見ることはなかった。それがせめてもの幸せであったといえるかもしれない。[3)]

注

1) 本稿の一部は日本弁護士連合会『自由と正義』第50巻3月号に発表したものであるが，加筆補充した。

2) 大倉喜八郎については文献は多いが，砂川幸雄『大倉喜八郎の豪快な生涯』草思社，平成10年の末尾の参考文献を見られたい。上記の砂川の他に次のものを特に参考とした。

大倉喜八郎『致富の鍵』大和出版，平成4年。

『大倉鶴彦翁』鶏友会，大正13年。

中村道岡『大倉喜八郎・石黒忠悳関係雑集』東京経済大学，昭和61年。

3) 石黒忠悳の参考文献としては，自著の『懐旧九十年』岩波文庫，昭和58年。

この他に，金尾清造『長井長義伝』日本薬学会，昭和35年。この中に薬学会の創始者長井の親友ということで石黒のことがしばしば述べられている。また，大倉喜八郎関係の文献の中に，これまた喜八郎と親友だった石黒のことがしばしば述べられている。